

徳島・新蔵遺跡 しんくら

- 1 所在地 徳島市新蔵町二丁目
- 2 調査期間 二〇〇四年(平16) 四月～一月
- 3 発掘機関 徳島大学埋蔵文化財調査室
- 4 調査担当者 中原 計・定森秀夫・中村 豊
- 5 遺跡の種類 城下町跡(武家屋敷)
- 6 遺跡の年代 江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(徳島)

新蔵遺跡は、徳島城下町を構成する六つの島の一つである「徳島」にあり、現在は徳島大学本部の敷地内に位置している。徳島城下町は吉野川河口に形成された沖積地上に立地し、六つの島と六つの地区で構成されている。「徳島」はそれらの中でも家老や中老といった上級武家の屋敷地が集中しており、城の三の丸的な役割を果たしていた。新蔵地区では、過去数回

にわたって(財)徳島県埋蔵文化財センターによって調査が行なわれており、屋敷境溝や石組で囲われた遺構が検出されている。今回の調査区からは、主要な遺構として、一七世紀後半から一九世紀にかけての片山家と蜂須賀家の屋敷境溝や、一九世紀の片山家屋敷地の中島・造り出しをもつ池状遺構が検出された。

木簡は現段階では一〇点確認している。うち一点は、一九世紀前半から後半の片山家屋敷地の池状遺構から、二点は一八世紀末頃の土坑から、七点は一七世紀中期から一八世紀後半までの土坑からそれぞれ出土した。

池状遺構S二一は、南北九m東西九mのほぼ正方形を呈し、造り出しと中島を有する。大量の礫と瓦、陶磁器類によって埋められていた。土坑S一八八は、南北二m東西一mの楕円形を呈し、下駄などの木製品が多く廃棄されていた。土坑S一八九は、南北一m東西六mと非常に大型の不整円形を呈する。一部調査区外にも延び、規模はもう少し大きかったと思われる。断面から、繰り返し遺物が廃棄されている状況が確認された。いずれの遺構からも多量の陶磁器、木製品が出土しており、現在整理中である。そのため、文字が書かれた資料が今後見つかる可能性があることを明記しておく。

8 木簡の釈文・内容

池状遺構S二一

- (1) ×須賀正親様 □村志津摩 衛門
 □□□□□□ (200)×(50)×2 081
- 土坑S一八九
- (2) ・「 山尾菊花 和□□□郎
 花紅 □□□□
 ・「
 210×105×5 011
- (3) ・「大」
 ・「□□□□」
 210×110×10 011
- 土坑S一八九
- (4) ・「▽□□斗入□ □□
 ・「▽□□□
 (100)×20×2 033
- (5) ・「▽□□□□□
 ・「▽□十□
 (90)×18×3 039
- (6) ・「▽五斗入□□
 ・「▽二八
 (110)×33×7 033
- (7) ・□斗入□□□□□
 ・□□□□
 (145)×22×3 059

- (8) 「▽□□□□」 125×22×3 033
- (9) ・南行□
 ・□□
 (135)×22×3 059
- (10) 「▽□□升□□」 (135)×22×2 039
- (1)は木簡の右端部分のみが残存しており、もとは長方形を呈していたと思われる。墨書は明瞭である。池状遺構は片山家の屋敷地内にあるが、隣りが蜂須賀家の屋敷地であり、池状遺構を埋め立てる時に両家から遺物を廃棄したものと考えられる。(2)(3)はともに完形で長方形を呈する。裏面にも墨書が認められるが、明瞭ではなく、判読しがたい。
- (4)～(10)は上端の左右に切り込みを入れたり、下端を剣先状に尖らせたりする付札状の形態をとる。墨書は表裏両面になされているものがほとんどであるが、ともに明瞭ではないものが多い。

(中原 計)